# 細胞ロボット演習

担当教員:森本 雄矢, 聶 銘昊

#### 演習の目的.

この演習の目的は、MATLAB を用いた AD/DA 変換の方法を学ぶとともに、生体材料(筋肉)の取り扱いを経験することである.

生体は筋肉の収縮運動によって動作を実現しており、筋肉を理解することはロボットを創ることにも生体動作を解析するのにも重要である. 生体は神経刺激によって筋肉の収縮運動を制御しているが、腹筋ベルト(sixpad など)のコマーシャルで見かけるように、電気刺激によっても運動を制御することができる. 本演習では筋肉の理解と情報処理による電気信号処理を目的として、筋肉の収縮運動の観察および MATLAB で生成した電気刺激による収縮運動制御を行う.

### 課題ファイルのコピーと環境設定確認.

ITC-LMS から演習用のプログラムをダウンロードし、解凍する.

MATLABを立ち上げ、ホームタブ内のアドオン⇒アドオンの管理を選択し、「Data Acquisition Toolbox」「Signal Processing Toolbox」「Audio Toolbox」「Data Acquisition Toolbox Support Package for Windows Sound Cards」がインストール済みであることを確認する.

「Data Acquisition Toolbox」「Signal Processing Toolbox」「Audio Toolbox」がない場合は、アドオン⇒アドオンの入手からインストールするようにしてください。「Data Acquisition Toolbox Support Package for Windows Sound Cards」がない場合は、ダウンロードした演習用フォルダ内の directsoundaudio.mlpkginstall を実行し、インストールする.

MATLAB でコマンド daq.getDevices()を実行. 利用可能な入出力デバイスが 4 つ表示され、入力と出力はそれぞれ 2 つずつあることを確認する.

#### 筋電演習で作った回路の確認.

出席番号順に TA に筋電演習で作った回路を持って TA のところにきて、故障していないかチェックする、はんだ不良や故障があった場合は、修理または交換を行う。

## 【課題 1】MATLAB を用いて PC からアナログ信号を出力.

課題 1a MATLAB で音声を流し、音声の再生レートや音量を調整する.

課題 1b MATLAB で筋電刺激用の信号波形を書き、plot で出力する.

課題 1c 筋電刺激波形をヘッドホンジャックより出力し、パワーアンプで増幅する.

課題 1d 出力波形を制御する.

## 【課題 2】Real time 信号入出力をつくる.

課題 2a FFT 復習&パフォーマンス評価.

課題 2b Session object を利用して Real time 信号入出力プログラムを作る.

課題 2c マイクに入力した生信号の強度でヘッドホン出力のオン/オフを制御.

#### 第2回の以降の演習

## 【課題3】課題1で作ったプログラムで筋肉を動かす.

課題 3a 筋電刺激波形の出力の復習.

課題 3b 電気分解の観察.

課題 3c 筋肉への電気刺激負荷.

課題 3d (自由課題) 筋肉への電気刺激負荷.

## 【課題4】課題2で作ったプログラムで筋電からカエル筋肉を動かす.

課題 4a 自分の筋電信号の強さを把握し、前回課題 2c のプログラムを調整する.

課題 4b 自分の筋肉の運動でカエル筋肉の動きを制御する.

課題 4c (自由課題) 運動量や運動パターンからカエル筋肉の動きを制御する.

## 【課題 1】MATLAB を用いて PC からアナログ信号を出力.

デジタル時代と言われている今,電子機器がほぼデジタル化されている。例えば演習用 PC の入出力端子の中、僅か残されたアナログインターフェースはサウンドカードのみである。サウンドカードが DAC (Digital-Analog Converter) と ADC (Digital-Analog Converter) を備え、アナログトランスデューサー(マイク、スピーカーなど)と組んで、音声の取り込みおよび出力の役割を果たしている。さらに、MATLAB の Data Acquisition Toolbox を使うことで、PC をオシロスコープまたはファンクションジェネレータとして使用することができる。https://jp.mathworks.com/products/data-acquisition.html

1a. MATLAB で音声を流し、再生レートや音量を調整する.

exla.m を実行し、Hallelujah の曲を再生してみよう.

初期設定での再生に続いて、再生レートを約1.9倍の速度、再生音量を初期音量の5倍にした Hallelujah の曲が流れるようにしよう.

<u>1b. MATLAB</u> で電気刺激用の信号波形を書き、plot で出力する. (TA チェック) ex1b.m を書き換えて、出力波形を周波数 1Hz、0.8V のパルスの長さを 20 ミリ秒として、10 秒間の出力が表示されるようにしよう.

また、筋肉を電気刺激する時は出力電圧の偏りがない方が好ましい。0.8V のパルスと-0.8V のパルスが交互に出力されるようにしよう。

ヒント: square(t)の関数を使用すると良い

1c. 筋電刺激波形を出力し、パワーアンプより増幅. (TA チェック)

ex1c.m の「ここにコードをいれましょう」があるところに<u>課題 1a,b</u> で作成したコードを適切なフォーマットで組み込む. なお, s.Rate は 8192 とすること. 連続で信号を出力するには s.IsContinuous を true にする必要があることに注意.

まず、ヘッドホンプラグを入れないまま、スピーカーから信号を聞きましょう.

(スピーカーから音がでない場合, PC の音量調整スライドを押し, 音声が出たことを確認. PC のスピーカーがミュート状態じゃないのを確認)

(バックグラウンドに実行している session は s.stop()で中止可能)

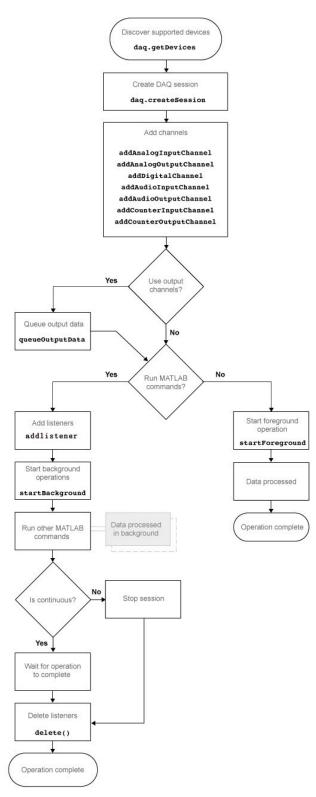
次に、オーディオケーブルで PC とパワーアンプを繋ぐ、パワーアンプにバッテリーを入れ、信号の増幅率をパワーアンプのスイッチで調整しでみよう.

増幅したあと、出力可能な最大パルス電圧は\_\_\_\_\_V. また、PC からの出力ではきれいな矩形波が出力されないことを確認する.

かによって速度が変わるようにする.1回でも入力に応じて変われば良い。

#### Session Creation Workflow:

https://jp.mathworks.com/help/releases/R2018b/daq/createsession.html?searchHighlight=daq&s\_tid=doc\_srchtitle 代表的な流れ:



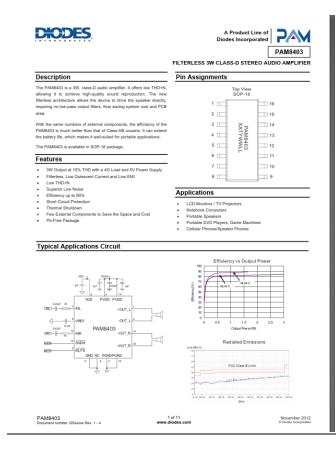
## パワーアンプの関連資料:

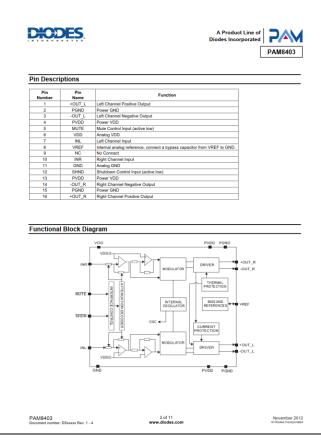
https://akizukidenshi.com/catalog/g/gK-15698/



## アンプ IC (PAM8403):

https://akizukidenshi.com/download/ds/diodeinc/pam8403.pdf









Absolute Maximum Ratings (@Tn = \*25°C, unless otherwise specified.)

These are stress ratings only and functional operation is not implied. Exposure to absolute maximum ratings for prolonged time periods may affect device reliability. All voltages are with respect to ground.

Parameter	Rating	Unit
Supply Voltage	6.0	
Input Voltage	-0.3 to V <sub>DD</sub> +0.3V	V
Operation Temperature Range	-40 to +85	
Maximum Junction Temperature	150	
Operation Junction Temperature	-40 to +125	°C
Storage Temperature	-65 to +150	
Caldering Topposesture	000 5	

#### Recommended Operating Conditions (@T<sub>A</sub> = +25°C, unless otherwise specified.)

Parameter	Rating	Unit
Supply Voltage Range	2.5 to 5.5	V
Operation Temperature Range	-40 to +85	°C
Junction Temperature Range	-40 to +125	°C

#### Thermal Information

Parameter	Package	Symbol	Max	Unit	
Thermal Resistance (Junction to Ambient)	SOP-16	θJA	110	*C/W	
Thermal Resistance / lunction to Case)	SOR-16	0	22	Criv	

PAM8403 Document number: DSxxxxx Rev. 1 - 4 3 of 11 www.diodes.com November 2012 © Diodes Incorporated

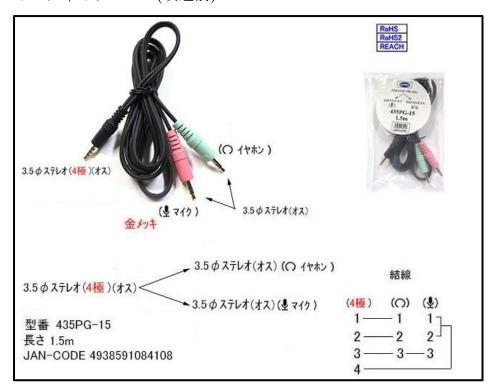
A Product Line of Diodes Incorporated PAM8403

 $\hline \textbf{Electrical Characteristics} \ (@T_A = +25^{\circ}\text{C}, \ V_{DD} = 5\text{V}, \ Gain = 24\text{dB}, \ R_L = 8\Omega, \ unless \ otherwise \ specified.) }$ 

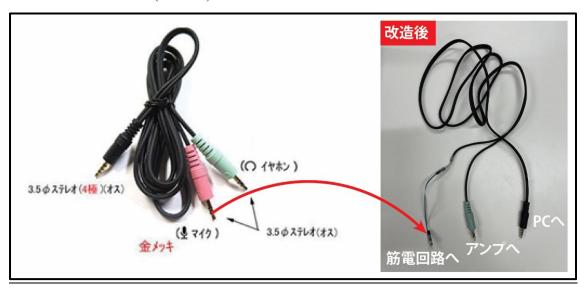
Symbol	Parameter	Test Conditions		Min	Typ	Max	Units
Vop	Supply Voltage			2.5		5.5	V
	Oulput Power		V <sub>DD</sub> = 5.0V		3.2		
		THD+N = 10%, f = 1KHz, R <sub>L</sub> = 4Ω	V <sub>DD</sub> = 3.6V		1.6		w
			V <sub>DD</sub> = 3.2V		1.3		
		THD+N = 1%, f = 1KHz, R <sub>L</sub> = 4Ω	V <sub>DD</sub> = 5.0V		2.5		w
			V <sub>DD</sub> = 3.6V		1.3		
Po Outp			V <sub>DD</sub> = 3.2V		0.85		
		THD+N = 10%, f = 1KHz, R <sub>L</sub> = 8Ω	V <sub>DO</sub> = 5.0V		1.8		w
			V <sub>DD</sub> = 3.6V		0.9		
			V <sub>DD</sub> = 3.2V		0.6		
		THD+N = 1%, f = 1KHz, R <sub>c</sub> = 8Ω	V <sub>DD</sub> = 5.0V		1.4		w
			V <sub>DD</sub> = 3.6V		0.72		
			V <sub>DD</sub> = 3.2V		0.45		
		V <sub>DD</sub> = 5.0V, P <sub>D</sub> = 1W, R <sub>L</sub> = 8Ω			0.15		%
	Total Harmonic Distortion Plus	V <sub>DD</sub> = 3.6V, P <sub>D</sub> = 0.1W, R <sub>L</sub> = 8Ω	f = 1kHz		0.11		
	Noise	V <sub>DD</sub> = 5.0V, P <sub>D</sub> = 0.5W, R <sub>L</sub> = 4Ω			0.15		
		V <sub>00</sub> = 3.6V, P <sub>0</sub> = 0.2W, R <sub>L</sub> = 4Ω	f = 1kHz		0.11		%
Gy	Closed Loop Gain	V <sub>DD</sub> = 3V to 5V			24		dB
PSRR	Power Supply Ripple Rejection	Von = 5.0V, Inputs AC-Grounded	f = 100Hz		-59		dB
PSKK	Power Supply Ripple Rejection		f = 1kHz		-58		
Ce	Crosstalk	V <sub>DD</sub> = 5.0V, P <sub>O</sub> = 0.5W, R <sub>L</sub> = 8Ω,	f = 1kHz		-95		dB
	Crossidik	G <sub>V</sub> = 20db					
SNR	Signal-to-Noise Ratio	V <sub>DD</sub> = 5.0V, V <sub>ORMS</sub> = 1V, G <sub>V</sub> = 20db	f = 1kHz		80		dB
VN	Output Noise	V <sub>DD</sub> = 5.0V, Inputs AC-Grounded	No A-Weighting		100		uV
		with C <sub>IN</sub> = 0.47μF	A-Weighting		150		<u> </u>
Dyn	Dynamic Range	V <sub>DD</sub> = 5.0V, THD = 1%	f = 1kHz		90		dB
n	Efficiency	R <sub>L</sub> = 8Ω, THD = 10%	f = 1kHz		87		%
		R <sub>L</sub> = 4Ω, THD = 10%			83		
Iq	Quiescent Current	V <sub>DD</sub> = 5.0V		16		mA	
		V <sub>DD</sub> = 3.6V	No Load		10		
		V <sub>DD</sub> = 3.0V			8		
IMUTE	Muting Current	V <sub>DD</sub> = 5.0V	V <sub>MUTE</sub> = 0.3V		3.5		mA
Isp	Shutdown Current	V <sub>DD</sub> = 2.5V to 5.5V	V <sub>SD</sub> = 0.3V		< 1		μA
Rosioni	Static Drain-to-Source On-State Resistor	Ins = 500mA, Vos = 5V	PMOS		180		mΩ
Balana			NMOS		140		
fsw	Switching Frequency	V <sub>DD</sub> = 3.0V to 5.0V			260		kHz
Vos	Output Offset Voltage	V <sub>IN</sub> = 0V, V <sub>DD</sub> = 5.0V			10		mV
VIH	Enable Input High Voltage	V <sub>DD</sub> = 5.0V		1.5	1.4		v
VIL	Enable Input Low Voltage	V <sub>DD</sub> = 5.0V			0.7	0.4	<u> </u>
VIH	MUTE Input High Voltage	V <sub>DD</sub> = 5.0V V <sub>DD</sub> = 5.0V		1.5	1.4		v
VIL	MUTE Input Low Voltage				0.7	0.4	
OTP	Over Temperature Protection	No Load, Junction Temperature	Vpp = 5.0V		140		V
OTH	Over Temperature Hysterisis				30		V

PAM8403 Document number: DSxxxxx Rev. 1 - 4 4 of 11 www.diodes.com November 2012 © Diodes Incorporated

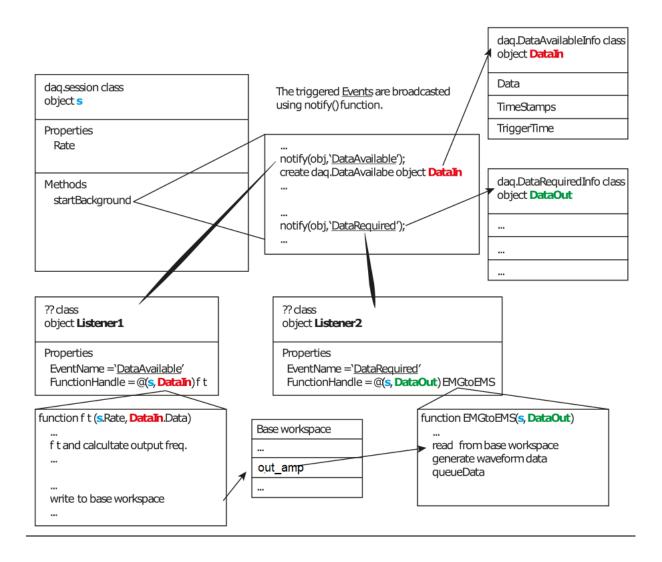
## オーディオケーブル(改造前):



## オーディオケーブル(改造後):



課題 2c 参考 workflow chart



#### 【課題 2】Real time 信号入出力を行う.

MATLAB の Data Acquisition Toolbox では、PC を Real time で入力信号を分析し、分析結果により異なる出力信号を出すことができる。

#### 2a. FFT 復習&パフォーマンス評価.

MATLAB で使われる FFT では、信号ベクターの長さにより異なるアルゴリズムが実行されている。信号ベクターが 512, 1024 などの 2 のべき乗であるとき、Radix-2 FFT アルゴリズムが実行され、計算が速くなる。

https://www.dsprelated.com/freebooks/mdft/Radix 2 FFT.html

信号ベクターの長さが2のべき乗じゃないとき,信号ベクターの長さが次に大きい2のべき乗になるように各行をゼロで埋めることで,これでFFTのパフォーマンスを改良可能である. 関数 nextpow2 を使用して ex2a.m にて新しい長さを定義する.

- 2b. Real time 信号入出力プログラムに FFT の機能を組み込もう. (TA チェック) ex2b.m 内の指定の場所にコードをいれ、Input チャンネルと刺激波長生成関数を設置する. さらに、「%%ここにパフォーマンスのいい FFT を組み込もう」のところに、パフォーマンスのいい FFT を実装する. ex2b.m を実行し、フーリエ変換された入力信号がグラフに表記され、PC のマイクに入力された音声に応じて FFT の結果が変化することを確認する.
- 2c. 音声信号の強度でヘッドホン出力のオン/オフを制御. (TA チェック) ex2b.m で追記した内容を ex2c.m に転記するとともに、33 行目と 63 行目にそれぞれの ヒントに従って、プログラムを完成させる. プログラムを実行し、マイクへの入力信 号の大きさにて、出力信号がオン/オフ制御できることを確認する. wave\_gen()の D やt の範囲が制御速度に与える影響を確認し、速やかにオン/オフ制御可能にこれらの値を変更すること.

(マイクに大きな音を当てると、スピーカーから<u>課題 1c</u>で実現したパルス音がオンになる.マイクへの入力が少なくなると、スピーカーから音は無し)

#### (ここから2回目)

## 【課題3】前回で作ったプログラムで筋肉を動かす.

## 3a. 筋電刺激波形の出力の復習. (TA チェック)

ex1c.m のパルス幅を変更し 5 ms にするとともに、周波数設定を変更し 1 Hz の刺激を与えるプログラムと 20Hz の刺激を与えるプログラムの 2 つを用意する. スピーカーから設定どおり出力されていることを確認した後、パワーアンプに接続し、オシロスコープで出力波形を確認し、電気信号として出力されていることを確認する.

## 3b. 電気分解の観察

20 Hz の電気刺激を与えるプログラムを用いて、食塩水が入っているシャーレに電気刺激を与える. 出力可能な最大パルス電圧(音量とアンプを最大にしたとき)にて電気刺激を流すと、電気分解にて泡が発生することを確認する. 電気分解が発生するということは、液中に電気を流せているということの証明になる.

電気分解の発生に必要な最小の音量 or アンプの増幅率を確認しよう。

## 3c. 筋肉への電気刺激負荷. (TA チェック)

課題 3b で明らかにした条件にて、筋肉が入った培養液に対して 1 Hz の電気刺激を与える. 筋肉がおよそ 1 Hz の頻度で収縮している. これが単縮である. 次に 20 Hz の電気刺激を与え,筋肉が収縮し続けることを確認する. これが強縮である. 強縮は筋肉にダメージを与えるので,5 秒以上連続して負荷しないこと. 単縮,強縮をそれぞれ引き起こせることを TA にチェック受けること

3d. (自由課題) 周波数を 1 Hz から 20 Hz の間で調整し、単縮と強縮の間で痙攣しているように見える周波数はおよそいくらか探し出す.

## 【課題4】筋電からカエル筋肉を動かしてみよう.

4a. 自分の筋電信号の強さを把握し、課題 2c のプログラムを調整する. (TA チェック) 筋電回路を設置する. 筋電回路の出力をオーディオケーブルのマイク端子と繋ぐ. ex2c.m を実行し、fft の plot を見ながら筋肉を動かす. 筋肉が静止状態のとき、|Y(f)|の値はおよそ\_\_\_\_\_ から\_\_\_. 筋肉が動いた瞬間、|Y(f)|の値はおよそ\_\_\_\_ から\_\_\_. 以上の結果により、ex2c.m の 66 行目付近、if ロジックの判定条件を適切に修正し、筋電の入力に応じて out amp の値が変わるようにする.

- 4b. 自分の筋肉の運動でカエル筋肉の動きを制御する. (TA チェック) 自分の筋肉を動かして電気刺激の出力をオン/オフ制御することで,カエル筋肉の運動を制御できるようにする.
- 4c. (自由課題) 自分の筋肉の運動量や運動パターンからカエル筋肉の動きを制御する. 筋電情報の変化をトリガーとして、出力される電気刺激の周波数・電圧量を制御し、様々な条件でカエル筋肉の運動を制御できるようにする. 例えば、腕以外に、心拍や眼筋などの他の部位の筋電情報からも、カエル筋肉の運動を制御できるようにする.

